

甲状腺外科草子 150

古文復習：金槐和歌集の実朝（後）

杉野 圭三

源実朝の最も有名な歌は百人一首 93 番であろう。

世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも（金槐和歌集 572）

この歌の響きには違和感がある。願望の終助詞とされる「もが」、「もがも」、「もがな」である。実朝の他の歌にもよく出ており、好きな使い方ようだ。たまさかに見る物にもが伊勢の海きよきなぎさの秋の夜の月（279）

足引きの山よりおくに宿もがな年の来まじき隠家にせむ（397）

とりもあへずはかなく暮て行年のしばし留むる関守もがな（399）

須磨の浦にあまのともせる漁火のほのかに人を見るよしもがな（460）

和歌にはド素人ながら、音の響きとして「もが」は耳に心地良くないものと感じられる。



実朝歌碑（佐藤幸毅撮影）

実朝は源頼朝の次男として 1192 年に生まれ、鎌倉の海も山も知り尽くしている。鎌倉の海岸には実朝の歌碑がある（実際に見ていません、残念！）



七里が浜からの江の島

由比ヶ浜（佐藤幸毅撮影）

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけて裂けて散るかも（696）

この歌は実朝の実体験から生まれたものだろう。

太平洋に面した鎌倉の海は時として荒々しい顔を見せ驚かされる。

実朝は 26 歳で世を去ったが、万葉集、古今和歌集、新古今和歌集まで全ての歌を読み、随所にその一部を取り入れている。短期間にこれだけの学習をするのは並大抵のことではなく、まだまだ和歌の道では成長途中だったのではないと思われる。

ここまで和歌に傾倒すれば、軍事や政治指導者としての資質を期待する方が無理だろう。

実朝暗殺に関しては様々な推測があり、「鎌倉殿の十三人」でも取り上げられた。執権北条一族にとって実朝は傀儡政権の代表として有難い存在であり、敢えて暗殺する意味はない。



鶴岡八幡宮大銀杏の暗殺現場（現在は若木に更新）

実朝暗殺は「吾妻鑑」にも記され、鶴岡八幡宮の大銀杏の影に隠れた甥の公暁による犯行とされる。暗殺現場の大銀杏には説明書きの看板などは無く、観光客に見向きもされていないが、苛酷な運命をたどった若き將軍を偲び合掌した。



吾妻鑑（佐藤幸毅撮影）

鶴岡八幡宮

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも（679）

世中にかしこきこともわりなきも思ひしとけば夢にぞ有ける（715）

鎌倉は夭折した大歌人の“夢のあと”である。

参考資料：Wikipedia, など

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025 年 8 月 28 日